

# 翻訳文学のススメ 出来事の背後には、生身の人間の息遣いが…

すぐれた文学作品は、その物語の中に没入することで、私たちに異なる風景を見せてくれます。そこに生きる人々もまた、私たちと同じで喜びや悲しみ、希望や苦悩を抱えた人たちであることを実感せずにはいられません。

ここに紹介した本は、2010年以降に十代の少年少女に向けて書かれた海外文学の翻訳小説です。作家がどうしても伝えたくてペンをとり、多くの十代の手に取られた本を、日本の若者にも読んでほしいと誰かが熱烈に思ったからこそ、こうして翻訳されて出版されているのです。今回は、戦争や内戦、貧困や差別がテーマの本を選んでいきます。

図書館には、現物が並んでいます。この冬休みに、何か一冊読んでみませんか？

今回の授業で読んだ本です。

## 『明日をさがす旅』 アラン・グラッツ 福音館書店 2019



故郷を追われて旅立つ3人の物語が時代や国を超え、同時進行で語られる！

ナチスドイツから逃れるユダヤの少年、カストロ政権下のキューバを出てアメリカに向かう少女、内戦下のシリアからヨーロッパをめざす少年。故郷を追われて旅立つ3人の物語が、時代や国を超えて同時進行で語られます。この物語の主人公たちは架空の人物ですが、実際にあった出来事を下敷きに書かれています。あとがきには現在も続く難民の問題についてもページを割き、若い世代に自分事として感じてほしいという著者の熱い思いが伝わってきます。(さくまゆみこ訳)

## 『ファニー 13歳の指揮官』 ファニー・ベン＝アミ 岩波書店 2017



命をかけた長い旅を指揮した13歳の少女の実話！

1939年、ユダヤ人への虐殺を逃れてフランスにやってきたファニーは、親と離れ「子どもの家」に妹と一緒に預けられる。村人は彼らを黙認するが、新しい司祭に密告され、遂には子どもだけでスイスに向かうことになる。リーダーは17歳の少年のはずが、彼の失踪によりたった13歳のファニーが11人の子どもたちを率いることに！ 1942年、本当にあった出来事を大人になったファニーが執筆。(伏見操訳)

## 『アウシュヴィッツの図書係』 アントニオ・イトゥルペ 集英社 2016



8冊の本がすべて。でもその8冊が多くの人を勇気づけた！

1942年、ポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所に秘密の「図書館」があった！ 禁じられた紙の本8冊を守り、修理して、読みたい人へと運び、貸し出す司書がいた。それは13歳のチェコの少女ディタ。ナチスの支配下、ランガナタンの「図書館の三要素」そのままの、奇跡の図書館だ。本を楽しみ、知る喜びがあって「たとえ一瞬でも幸せなら」生きる力につながる。実在の人々が登場する。(小原京子訳)

## 『父さんの手紙はぜんぶおぼえた』 タミ・シエム＝トヴ 岩波書店 2011



10歳の少女の逆境を支えたのは、父の直筆の手紙だった…。

オランダで暮らしていたユダヤ人の少女は、ナチスの侵攻を逃れて名をリーネケと変え見知らぬ家に預けられます。ユダヤ人と知られないために緊張の日々を送りますが、父からのユーモアたっぷりの手紙が10歳のリーネケの心の支えになります。ドイツ兵に見つからないために処分されたはずの手紙が9通現存していて、(本の中に登場しますが) これを読むだけでも父親の愛情が胸に迫ります。(母袋夏生訳)

## 『郊外少年マリク』 マブルーク・ラシュディ 集英社 2012



片隅に追い込められた移民の少年の人生

パリに住むマリクという少年の5歳から26歳までの物語だ。彼が住むのはパリ郊外の団地(シテ)。小学校に入学した時から腕力がものをいう環境に置かれ、向上心を持つこともできず、ただただ素行が悪くなっていく。そして差別も理不尽もマリクにとっては日常茶飯事だ。そんな絶望的な人生をマリクは時にはユーモアを交えて語っていく。絶望と希望の物語だ。(中島さおり訳)

## 『ぼくたちは幽霊じゃない』 ファブリツィオ・ガッティ 岩波書店 2018



海を越えてたどりついた地はけっしてバラ色ではないが、それでも人生は開ける！

ビキはバルカン半島の小国アルバニアの少年。7歳のとき、母と妹と共に、ボートでイタリアに渡る。想像を絶する命がけの過酷な海上の旅を終えて、やっとたどりつく。先に働きに出た父に会えるが、父は川岸の泥地のバラックに住んでいた。厳しい生活の中でビキは懸命に新しい人生を切り開いていく。イタリアの学校教育の移民受入がすばらしく、日本の現実を思う。ビキは今を生きる実在の少年。(関口英子訳)

## 『ヒトラーと暮らした少年』 ジョン・ポイン あすなろ書房 2018



「ヒトラー」のカリスマ性に惹きつけられた少年末路…

ドイツ人の父、フランス人の母を持ち、パリで暮らしていた少年ピエロは、7歳で両親を亡くし、孤児院を経て叔母に引き取られます。そこは叔母が家政婦をしていたヒトラーの別荘だったため、15歳になるまでの8年間、ヒトラーを間近に見ながら成長していきます。ピエロが次第に父の国ドイツと、カリスマヒトラーに傾倒していく様子は当然でありながら一方で痛々しく感じられます。終幕にも注目を。(原田勝訳)

## 『ザ・ディスプレイスト：難民作家18人の自分と家族の物語』 ヴィエト・タン・ウェン著 ポプラ社 2019



自身もかつてベトナム難民だった著者が、難民作家たちに「どうやってここまでたどり着いたか？」という質問に答えてもらっている。いわば作家本人と、その家族の物語だ。たどりつくまでも波乱に満ちているが、その先も決して平坦ではない。「ザ・ディスプレイスト」とは、土地を追われ、移動を余儀なくされた者たちのことを言う。深い“喪失感”を抱く難民たちが危険視され、除外されるとしたら…。(山田文訳)



『凍てつく海のむこうに』 ルータ・セペティス 岩波書店 2017



悲劇の歴史のなかにある一人ひとりの物語

コートで秘密を覆い隠す 15 歳のエミリア。深い後悔を抱え、傷ついた人を看護する 21 歳のヨアーナ。復讐をリュックに隠す青年フローリア。英雄になることを夢みる 17 歳のアルフレッド。第二次世界大戦末期、ソ連軍から逃れるハンニバル作戦、映画「ダンケルク」の救出作戦を上回る東プロイセンからの難民救出作戦で 4 人の若者は出会い、交差していく。(野沢佳織訳)

『片手の郵便配達人』 グードルン・パウセヴァンク みすず書房 2015



戦争を美化することを否定する美しくも残酷な物語

戦争で片手を失った 17 歳のヨハン。来る日も来る日も 7 つの村を順に巡って手紙を届けている。戦地から届く手紙は、息子が、夫が生きている証。時には「黒い手紙」と呼ぶ哀しみを知らせる手紙が届くときもある。それでも人々はヨハンを待ち焦がれている。終戦間近のドイツで、誠実に暮らす青年の物語。衝撃的なラストに国家とは何かを問い、戦争のもたらす悲劇について言葉を失う。(高田ゆみ子訳)

『わたしがいどんだ戦い 1939 年』 キバリー・アム・カ・アラッド・リー 評論社 2017



戦時下のイギリスで 10 歳の少女が戦った相手とは……

足が醜く内側に曲がったエイダは部屋に閉じ込められても当然の存在として育てられた。けれど弟と一緒に疎開するためには、立ち上がって学校まで行かなくてはならない。エイダは歩く練習をし、母親に内緒で弟と一緒に田舎に疎開する。そこで出会った一人暮らしの女性スーザンと村の人びと。エイダは少しずつ自分らしく生きるための自分を探し始める。(大作道子訳)

『列車はこの闇をぬけて』 デイルク・ラインハルト 徳間書店 2017



今、現実にもメキシコとアメリカの国境で起きていること

アメリカにいるお母さんに会うため、14 歳のミゲルはグアテマラからメキシコへと抜けてきた。そして同じようにアメリカを目指す年代の 4 人と共に、貨物列車に乗り、さまざまな危険が待ち受けるメキシコを縦断する旅が始まった。アメリカを目指し旅する若者を丹念に取材して書き上げた物語。今、まさにアメリカを目指してこんな危険な旅をしている人々がいるのだ。(天沼春樹訳)

『はみ出しインディアンのホントにホントの物語』 シャマン・アレクシー 小学館 2010



白人ばかりのエリート高に編入したインディアン居留地の少年を描いた自伝的小説

現代のアメリカ先住民として居留地に生まれ育った主人公は、居留地の中の高校から、白人ばかりのエリート高校に移ることにします。環境が全く変わり、差別にもあいますが、高校生活を切り開いていきます。主人公のやんちゃな少年らしさ、ポップな語り口で読みやすいですが、その中にアメリカ社会の抱える貧困や差別、格差を描いています。フィクションですが、作者の自伝的物語です。(さくまゆみこ訳)

『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ あなたがくれた憎しみ』 アンジー・トーマス 岩崎書店 2018



今もまだアメリカが抱える差別問題をリアルに描く

ギャングがはびこる黒人たちの街に暮らす高校生のスター。ある日、久しぶりに再会した幼なじみのカ ril が、目の前で警官によって射殺されてしまう。何もしていないのに……。カ ril が射殺されたのはまるで仕方のないことのように事実と異なる報道がなされ、スターはカ ril の声を正しく伝えるために立ち上がる。スターの目を通して描かれるアメリカのリアルな差別問題。(服部理佳)

『ハーレムの闘う本屋 ルイス・ミシヨールの生涯』 ゲオンダ・シヨ・ルソ あすなろ書房 2015



自らの歴史を知らずしてこの地に根をはることはできないと、本を手渡し続けたルイス

掘り出し物の本を求め、議論し、演説を聞きに集まる黒人客の絶えない本屋があった。ルイス・ミシヨールは 1939 年ニューヨークのハーレムに黒人専門の本屋を開く。「自らの歴史を知らない人種は、根のない立木のようなものだ」「私の最も重要な使命は黒人の手に本を渡すことだ」—客がいれば何時までも店を開けている。そんなミシヨールの生涯を、親族や友人の証言や記録、FBI の報告書をもとに伝える

『モンスーンの贈りもの』 ミタリ・パーキンス 鈴木出版 2016



貧しい孤児は結婚するしかない？ それとも……？

アメリカの高校生、ジャズ (ジャスミン) は、一緒にビジネスをしているスティーブに恋をしているが、容姿へのコンプレックスから素直になれない。夏休み、彼女はインドの孤児院育ちで現在は社会活動家の母と一緒に、インドに行くことになった。母の活動なんて興味なかったのに、お手伝いさんとして孤児院から来たダニタと親しくなるうちに変わっていくジャズ。モンスーンがくれた贈りものとは？ (永瀬比奈訳)

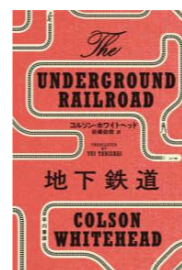
『さよなら、スパイダーマン』 アナベル・ピッチャー 偕成社 2017



母も父も頼れないと分かった時に、少年は立ち上がる！

娘がイスラムテロの犠牲になって、父母は悲しみから立ち上がれなくなってしまい、5 年たって家を出た母と、酒浸りの父を見つめる 10 歳のジェイミーには、姉の死も両親の離婚も現実とは思えません。唯一彼を理解してくれたイスラム教徒の少女スーニャを通して、だんだんと自分の置かれた状況を納得していきます。ダメダメな大人たちの愛情に頼らずに成長していく子どもを描いています。(中野怜奈訳)

『地下鉄道』 コルソン・ホワイトヘッド 早川書房 2017



あきらめない強さと賢さを持った奴隷少女コーラの物語。

19 世紀のアメリカ南部で地下鉄道と言ったら、逃亡奴隷を助け、北部へと逃がす秘密組織を指すが、この物語では、実際に逃亡奴隷を運ぶ鉄道が地下を走っていた、という虚構世界が舞台。15 歳の奴隷少女コーラは仲間を誘われ、逃亡を決意する。鉄道に助けられながらも、仲間とはぐれ、奴隷狩人に追われ…。甘さのかけらもない厳しい逃亡劇だが、あきらめないコーラの強さとその反骨心に勇気が湧いてくる。(谷崎由依訳)